

藤原宮第26次（宮西辺部）の調査

（昭和53年11月～昭和53年12月）

この調査は、駐車場建設に先立って実施したものである。調査地は、藤原宮の西辺地区にあたり、第10次調査地（昭和48・49年）の東側に接する。

調査区での層序は、上から整地のための盛土、耕土、床土、黒褐色土、黒色土、黄灰色土の順で、藤原宮期の遺構は黒褐色土上面で検出した。この黒褐色土およびその下層の黒色土は、弥生時代の遺物包含層でもあり、上層の黒褐色土には弥生時代後期の遺物が、下層の黒色土には弥生時代中期の遺物が多量に含まれていた。なお、弥生時代の遺構については、藤原宮期の遺構を破壊しないよう発掘区の中央部と南西部とに限定して調査をおこなった。検出した主な遺構は、藤原宮期のものとして、建物1・塀1・溝1・土壇1・小穴多数があり、弥生時代のものとして、溝1の他に多数の土壇や小ピットがある。

<藤原宮期の遺構>

掘立柱建物S B 2450は、身舎3間×2間の小規模な東西棟で、北面に廂がつく。梁行1.8m等間、桁行1.66m等間である。塀S A 2440は、掘立柱建物S B 2450の北廂から約9m北にある東西方向の掘立柱塀であり、柱間は2.1m等間である。3間分を検出したが、第10次調査では検出していないから、西方へはそれほど伸びないものと考えられる。

土壇S K 2460は、東端が発掘区外に拡がるため全体の規模は明らかでないが、現状では東西方向に長い長方形を呈す。幅2m前後、深さ0.25m前後で、長さ7.5m分を検出した。土壇内からは7世紀後半の土器と藤原宮期の土器・瓦が出土した。溝S D 2430は、南北方向に走る素掘りの溝で、発掘区の北東隅で検出した。溝の両肩は調査区の北端で確認し、幅2.3m、深さ0.3mをはかる。

<弥生時代の遺構>

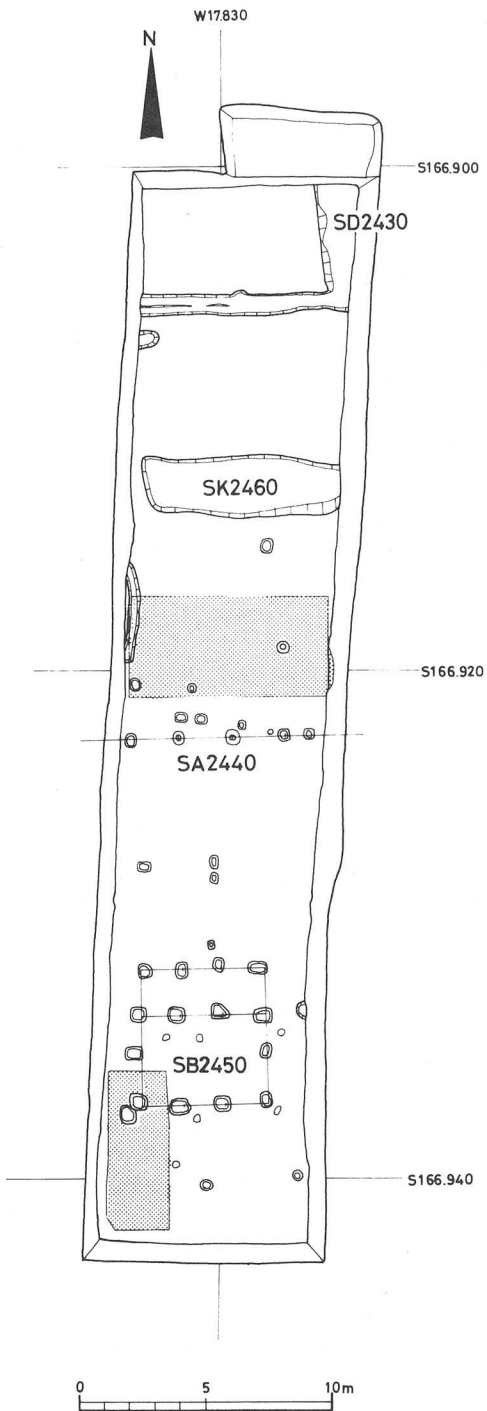
土壇S K 2469は、径約1.5mのほぼ円形を呈し、深さ約0.3mの土壇。遺物は出土していないが、層位から弥生時代中期の遺構とみなせる。土壇S K 2470

は、ほぼ楕円形の平面をもち北西部が小さく突出する。東西径約 1.4 m、南北径約 1.1 m、深さ 0.3 mをはかる。土壇内からは第 V 様式の古い段階の高杯などが出土した。溝 S D 2480 は、北西方向に流れる溝で、幅約 2 m、深さ 0.9 mをはかる。溝の堆積土から第 III ~ V 様式の土器が出土した。

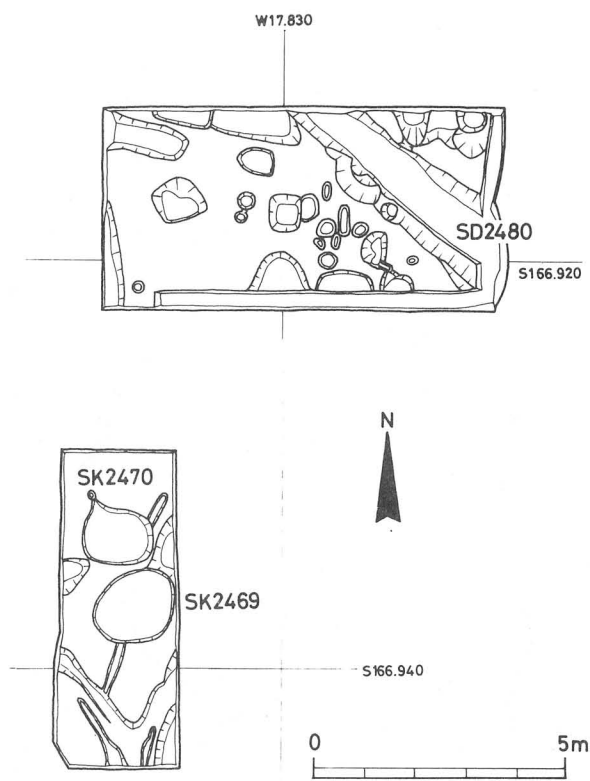
<出土遺物>

出土遺物には、瓦・土器・石器・土製品などがある。藤原宮期の遺物としては、瓦と須恵器・土師器があるが、出土数は余り多くない。これに対し弥生時代の遺物である甕・高杯・器台・長頸壺などの土器が多量に出土した。弥生時代の遺物としては、この他に手捏ねのミニチュア土器（長頸壺・脚付鉢）、土器を転用した紡錘車、石庖丁などがあり、特記すべきものとして土鐸の破片 2 点がある。

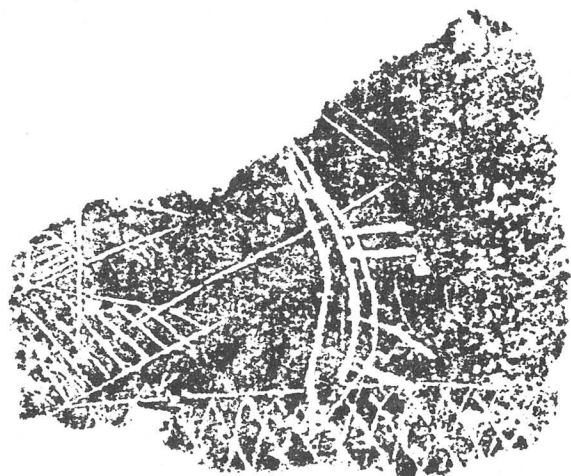
今回出土した土鐸は、従来の銅鐸形土製品とは異なり、銅鐸をそれに近い大きさに模した土製の鐸の一部と考えられるもので、復原すれば高さ 40 ~ 50 cm ほどの大きさになる。2 点出土した破片のうち、一つには鹿とみられる動物文とそれを囲むように線鋸歯文・斜格子文を配し、他の一つには弧を描く



第26次調査遺構配置図（1：300）
網部分の詳細は次頁



第26次調査弥生時代遺構配置図（1：150）



第26次調査 弥生時代遺物包含層
出土土鐸拓影（3：4）

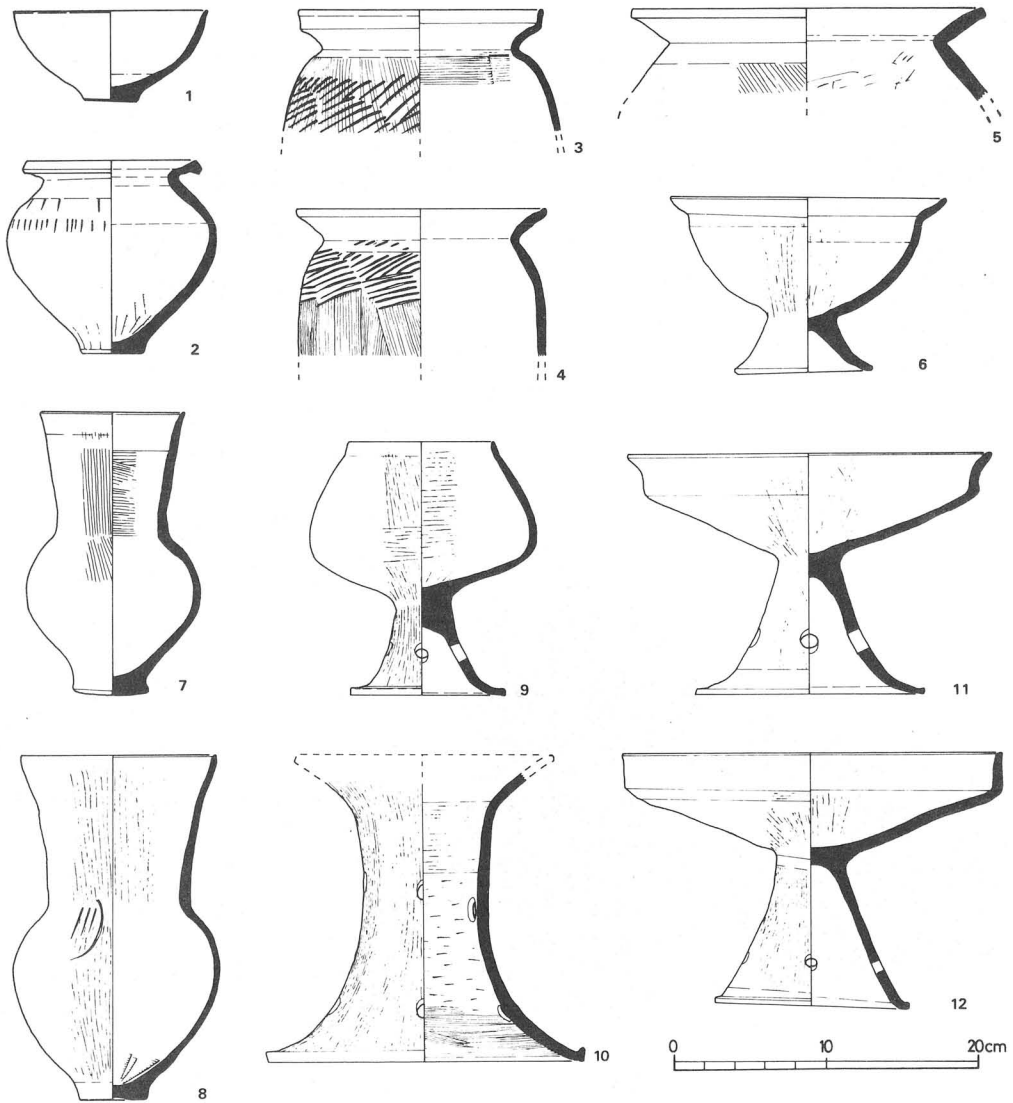
ように線鋸齒文を配す。いずれも篋描きにより表現される。前者は鐸の左下部分，後者は鐸の吊手部分に相当する破片である。土鐸の年代については，土鐸自体の文様構成や調整手法・胎土の状況から，弥生時代中期末頃と考えるのが妥当であろう。ただその出土地点は，建物S B 24 50の南西隅柱掘形直下にあり，層位的に黒褐色土と土壇S K 24 70との中間に位置するから，上層に属する可能性が大きい。

<まとめ>

今回の調査成果と問題点についてまとめておこう。今回検出した南北溝S D 2430は，西二坊坊間小路西側溝の可能性を残している。西二坊坊間小路S F 10 82およびその西側溝S D 1080は第5～7次調査で確認されている。この西側溝S D 1080と今回検出の溝S D 2430が同一のものとすると，両側溝を結ぶ線は，方眼方位に対し北で $0^{\circ}45.5'$ 東に振れることとなる。この数値は，従来知られている条坊の振れと逆方向を示している。また溝幅に

ついても S D 1080 が 1 m 前後であるのに対し、S D 2430 が 2.3 m もあるなど、両者を同一の溝とするには疑問が多い。ただ調査では S D 2430 を一部しか検出しておらず、最終的な判断は今後の調査にまつ必要がある。

飛鳥川東岸の微高地に立地する調査地周辺は、すでに第 3・10 次調査で弥生時代集落の存在を確認していたところである。今回の調査結果からすると、発掘区の南へ向い漸次出土遺物や遺構の存在が少くなる傾向が指摘できるから、遺跡が調査地の南方へさほど拡がらないという見通しが得られたのである。



弥生式土器実測図 5・12-S K 2470, 他は包含層